



次回例会のご案内

是非ご出席ください！ 課題を共有しませんか？

日時 ▶ 6 月 7 日 (月) 午後 7 時 ~ 9 時

会場 ▶ 愛宕町教会

奨励 ▶ 山田 宏亨 神父 (甲府・韮崎・塩山カトリック教会助任司祭)

発題 ▶ 「弱い立場に立たされた人々の中に神の愛をみる」
ーやまなしライフサポート等の活動を通じてー

木村 輝三 氏 (やまなしライフサポート事務局長、
甲府カトリック教会員)

2009 年度の組織会

連絡会代表 小島章弘

連絡会委員 清藤城宏 (書記)

横山文彦、古屋秀樹 (会計)

北 紀吉 (顧問)、鈴木信行

編集後記

☆第 4 回の例会は 21 名の出席で持たれました。
今回は、県下でも社会的に認知度が高く、また大きな影響力を与えてきた山梨 YMCA で 30 年間ご奉仕なさった大和田浩二前総主事からお話を伺いました。
YMCA が祈り会から始まったことをお聞きし、もっとも教会との繋がりを強固に持ち、また信徒運動の有機的な繋がりを中心的役割を担えるような場、活動となるように、今後とも知恵を出し合っていく必要性があることを更に強く思われました。

(清藤記)

3 ページより続き

と思う。英和大では留学生で学 Y が出来つつある。それが他の大学に影響していけばと思っている。建物についてはこの 10 年位の大きな問題。修繕が毎年あり対策を考えている。どこかに移転するか、決断しなければならない。長期計画委員会があるので委ねられている。教会との連合化も、一つの構想に入と思う。

問：私も大和田さんと一緒にやってきた者だが、やはり課題は若い人をどう繋ぐかだ。Y の永遠の課題。建物はゼロから始めて 2 度 3 度と建ててきた。クリスチャンセンター的な中で守りきれぬか課題だ。

答：最近、学童保育で新しい子どもたちが参加し活気を帯びてきている。また社会人のボランティアも加わってきた。わかば支援学校の卒業生がリーダーとして加わって子どもたちと接してくれている。

いろいろな人が関わり、YMCA が多様性をしっかり捕らえており、良いと希望を感じている。

司会者：この会は知恵を集めることが出来る会だと思っている。各々与えられたことをやっているが、それだけでは十分ではなく、また見えなくなっている部分がある。今、社会でいろいろな問題が起こっている。例えば貧困とか。「イエスは主である」と告白する者によって始められるということが、この社会に必要とされると思っている。そのための知恵を出し合って、どう有機的に繋がっていくか考えている。大和田さんも山梨から離れて、違う所から見ていただくと山梨のあり様が見えてくるかもしれない。これからも山梨の可能性を考えていただき、これまでの 30 年間で豊かなものとしてお返しいただけたらと思う。



Tomosibi

灯

山梨県キリスト教連絡会

2009 年 10 月設立 代表：小島章弘

事務所 ▶ 〒 400-0024 甲府市北口 3-4-23 日本基督教団 愛宕町教会内 Tel 055-253-3150

NEWS LETTER N0.4

奨励「信仰に根ざした働き」

松木田 博 牧師 (甲府教会) コリントの信徒への手紙一 12:1~11

海ぞいの町であるコリントは商業都市として栄えていた。大都市らしく多種多様な人々が集まっていた。そういう中であって、教会の活動や働きも多岐にわたっていた。

キリストの体である教会、その教会には様々な働きが委ねられており、どんな働きも福音の宣教へと向かっているが、しかし、集う者が皆同じ奉仕をする訳ではない。人それぞれに違う奉仕が求められている。ある人は音楽に、会計に、愛餐会の準備にと、それぞれが違う働きを忠実に務めることにより、キリストの体である教会が一つの有機体として生きていくといえる。私たちが各々に与えられた働きを忠実に果たしていく時に、福音宣教の業が進められていく。

ここに「賜物」について書かれている。それぞれの賜物は、当時の教会がキリストの体として立つていくために必要であったから与えられていたのである。現代の教会においても、各自に福音宣教に必要な賜物を与えられている。しかし、コリントの教会においては、それぞれに与えられた賜物についての誤解が生じていた。与えられた聖霊の賜物でその人の能力の優劣を評価することまで起きてしまった。どうしてそのようなことが起きてしまったのか。福音の宣教に仕えるはずの者たちが、そこから離れてしまったのである。なぜかという、一番大切なことを忘れてしまい、物事を現象面だけで見てしまったからではないか。

では一番大切なことは何か。3 節「ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも『イエスは神から見捨てられよ』とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです」。このことを前提に、教会に集う私たちに与えられている賜物についての教えが述べられている。霊によって語る人には、「イエスは主である」と告白する信仰が第一に



あることを忘れてはならない。たとえどんなに優れた奉仕を捧げたとしても、もしそこに「イエスは主である」と告白する信仰がなければクリスチャンの奉仕とは言えない。クリスチャンの奉仕は、恵みへの応答である。もしそれがなければ、ごく普通のボランティア活動であり、キリストの体である働きではない。また、「イエスは主である」という告白は、聖霊によらなければできない。私たちは、キリストから託された働きのために「聖霊の賜物」をいただいているのである。

教会には多様な働きがある。しかし私たちが結びつけているのは、同じ活動をしているとか同じ団体に属しているとかではなく、中心は「イエスは主である」と信じてそう告白する信仰なのであり、その信仰があるならば、一致した働きとなることを忘れてはならない。私たちが結びつけているのは「イエスを主とする信仰」である。どのような業であっても、この信仰を告白するならば、そこには「主に結び付いた枝」としての働きがある。

山梨県下のキリスト教宣教においても、多様性があると思う。しかし、教会に連なる私たちは、何よりも「イエスを主と告白する信仰」に立ち、一致して参りたい。

第 4 回例会 発題報告

YMCA での 30 年間の歩みを振り返って

大和田浩二氏（「東山荘」所長、前「山梨 YMCA」総主事、日本基督教団甲府教会員）



まず初めに、「YMCA」について話したい。「YMCA」とは、「Young Men's Christian Association」の略で、1844 年にロンドンで設立されたキリスト教精神に基づく非営利の青少年育成・社会教育団体と定義されている。

ここで少し深く考えてみたい。「1844 年」という時代、そして「ロンドンで」ということの意味について。当時ロンドンは世界一の大都市であった。19 世紀半ばまでは決して大きな都市ではなかった。では、どうして 19 世紀の半ばに世界一の大都市になったのか。それは紛れもなく「産業革命」の流れに乗ったからである。産業革命は蒸気機関を発明し、それにより巨大な工場が動いた。当時のハイテク産業は紡績工場で、これが蒸気機関のハイテク技術により大量生産できるようになった。これが革命である。大きな工場がどんどんできた。そのため、若者がイギリスの田舎町からロンドンに集められ、また集まってきた。ロンドンは活気づき、夜も赤々と灯がともる大都会となった。しかし、輝かしい光景ばかりではない。むしろ逆の部分が多かった。当時は働く者のための法律もなく、働かせるだけ働かせた。そして身体を壊した者は捨てられるという労働環境であった。金持ちが生まれた一方で、貧しさと身体・精神に異常をきたした者たちが生まれた。これは現代にも似ている。ハイテク産業・IT で大金持ちを生み、一方ではひきこもり、というような社会現象を生んでいる。同じようなことが、この産業革命の時代にもあった。

産業の発展においては、負の部分もクローズアップされる。そういう状況を何とかしたいという人も現れる。当時ハイテク産業であった呉服問屋で、住み込みで働いていたジョージ・ウィリアム青年が、呉服問屋の 2 階に青年を集めて祈会を始めた。その祈会で、健全な娯楽、人生を見つけだすことをやっていこうと話し合われ、それが Y M C A の始まりだった。

このことが、様々に波及していき世界にも広まった。やがてアメリカにも普及し、特にスポーツの面で発展した。体育学校ができ、水泳、バスケットボール、キャンプなど。

やがて 1880 年、アメリカから日本にも入って来た。それは丁度、明治の文明開化の時代で、キリスト教と密接な関係があったため、宣教師と共にあるいはアメリカに留学し帰国した若者たちの考えで Y M C A 活動が始まった。今では世界 122 の地域に広がり、ぞ

ぞれの地域で望まれる活動を行っている。例えばアフリカでは難民救助活動など。日本では教育的活動が主で、明治時代は丁稚さんたちの夜学校、それが最初の大きな働きであった。大都市では専門学校、大阪では予備校もあった。

★
山梨では、1946 年 5 月 1 日、甲府市に設立された。敗戦の翌年で、まだ焼け野原の残っている時だった。警察署の講堂で発会式が行われた。東京から帰ってきた青年の強い思いから、YMCA 活動が始まった。

市川規一さんという歯科医が最初に YMCA 活動を進めた。熱心に YMCA のことを人々に語った。そして、高野孫左右門さん、布能壽英さんなどが繋がっていった。そのようにして山梨県下に広がっていった。近隣の大きな県、たとえば静岡県や長野県は経済・人口ともに大きい。YMCA は無い。経済の発達や人口の多さによってではなく、そうした熱心な人々の力により、YMCA 活動は広まっていくということが、山梨の事例によってもわかる。

★
もう一度 1844 年に戻ると、YMCA スタートの要因に産業革命があったと申し上げたが、それだけではない。キリスト教の一つの流れがあったようである。ピューリタニズムの流れ。もう一つは「Big Awakeness」というリバイバル。もう一度「神に立ち帰れ」という動きと、YMCA 運動は無関係ではなかった。
祈禱会から始まったので、どちらかというと福音系キリスト教会の特色を持っていた。一方で 1900 年代にはエキュメニカルな動きに関わるようになった。世界的に YMCA 活動した人物に、アメリカ人のジョン・アールモットという人がいた。後にノーベル平和賞を受賞した。その人が、学生たちのキリスト教運動をリードした。産業革命による負の部分プラスに変えようという動きと共に、キリストに立ち帰れという動きがあった。

★
山梨の YMCA は、最初に歯医者・市川規一先生の居間で始まった。英語サークルなどのグループ活動が行われた。中でも一番大きなインパクトのあったものは、昭和 20 年代半ばくらいからの活動で「ハイ Y・高校生 YMACA」だった。戦後、新制高校がスタートしたが、賀川豊彦が当時の甲府中学（今の甲府一高）で講演をした。神の国を説き、多くの者が決心書を書いたという。その中には、元山梨 YMCA 総主事の大沢英二さんもいた。

当時 GHQ がいたが、GHQ といえどもキリスト教教育をするのはいかがなものかという見解があったらしい。しかし、当時一高の校長であった近藤兵衛は大変

熱心なクリスチャンで熱血漢であった。近藤は GHQ に乗り込んで、学生には宗教教育が必要であることを説いて、課外活動を行う自由さを与えるように請願した。そこから、高校に「ハイ Y」という活動が生まれた。夏の泊まり込みのワークキャンプが盛んであった。桑島一郎さんが、当時、ワークキャンプに力を入れたという。朝の祈りに始まり夕べに祈る、そして聖書研究と、ある意味では厳格にキリスト教信仰をその中に入れていった。その中で何人もクリスチャンになったと聞いている。そのようにして起こされた人たちによって「YMCA はどのような活動をしていったらよいか」という形づけがなされていった。

現在の山梨 YMCA の活動は、大沢英二さんの時代には、英語学校を県下で初めて行い、大きな広がりを見せた。苦勞せずとも、人が集まって来る時代であった。そういう教育活動を行ってきた。現在では学童保育「プライムタイム」が山梨 YMCA の活動の主流になっている。また、子どもたちのキャンプ活動が盛んである。時代時代により、活動内容も移り変わっていると言える。

★
山梨 YMCA での 30 年間の私の歩みの中で、挙げたい活動の一つは、1981 年に始まった障害児と健常児の「統合キャンプ」である。今では「ふじやまキャンプ」と呼んでいるが、それを開始して今年で 30 回を迎えている。このキャンプはボランティアリーダーのトレーニングの場になっている。この 30 年、私はディレクターという立場だったが、いろいろなことを学ばせていただいた。一つのエピソードをお話したい。私の家内は「わかば擁護学校」という知的障害児の特殊学校の教員をしている。初め、家内は音楽教師をしていた。それが障害者教育教師へと変わったが「なぜか？」と聞いたところ「それはあなたに責任がある」と言われて驚いた。私がキャンプに行き、帰って来ると「障害児と過ごしたことが楽しい」と言ったらしく、そのことが影響を与えた。豊かな体験が、他の人に伝わることもあるのだと感じている。

また、1992 年に「山梨外国人 인권 ネットワーク・オアシス」が設立し、不当売春行為者の救出にかかわった。高度成長に伴い、労働力不足で外国からドッと労働者がやってきた。そのことに日本の法律が対応できず、いろいろなマイナス面が起こった時代であった。この問題に対応しようとしたのが「オアシス」であった。当時、甲府駅前にあった山梨 YMCA の「駅前ランチ」で活動が始まった。

それから、「やまなしライフサポート」。甲府カトリック教会が中心となり行っている「路上生活者のための炊き出し活動」に、私も昨年から係わりを持ってきた。スタートしたばかりのフードサービスから食料を回すこととマッチして上手くいっている。満ち足りていて何かを求めるといえるのではなく、困っているところや何か難しい状況にあるところに関われたことは、私にとって有り難い 30 年間であった。そしてまた、そういう活動に関わることを許してくれた山梨 YMCA のふとこの深さを感じている。

★
現在、私は「東山荘」で働いている。「東山荘」は 1915 年に作られた学生寮で、大学 YMCA を根づかせるため学生を寮に住まわせ、そこでしっかりと YMCA 活動やキリスト教について教え、また卒業していった人々を YMCA 活動やキリスト教に繋げようとの目的を持っている。5 年で 100 周年を迎える。東山荘の使命は、学生がキリストについて学び、信仰を自分のこととしてとらえる場を作ることである。ゆえに、これから YMCA を担っていく人材を育成する研修機関、研究機関をここに移した。2～3 ヶ月寝食を共にして、キリスト教理解と YMCA がキリスト教を基盤にしてどう立っていくかを学ぶ研究機関である。「東山荘」人を作り出していく使命がある。

私はこれまでも、自分に何が出来るかではなく、動かされてきたと思う。山梨県下の教会一致の集まり等も一緒にやらせていただいた。何もない自分を神が用いてくださったことを有り難いと思う。

山梨 YMCA 総主事の任を露木淳司氏にバトンタッチした。皆さまに育てていただければと思う。YMCA は、一人の総主事が動かす所では決してなく、ボランティアの方々・理事会、常議員会等意思決定機関の方々、そしてワイズメンのサポートがあって強力に支えられている。これからも YMCA 活動を通じ、また様々な人材を生み出すことで地域に貢献していければ大変良いと思っている。

【質疑応答】
問い：YMCA の根幹はキリストであり、そこは外せない。教会との繋がりが大事だと思う。しかし限られた教会との関わりだったように思うが、どう考えておられるか？

答え：関係は日本基督教団が中心になっている。教会一致の繋がりもあるが十分ではなかった。フェイス to フェイスが必要で、牧師・信徒の顔繋ぎが必要だと思う。韓国のウリ教会にホールを使っている。そういうことも一つの教会との繋がりでないかと思っている。

問い：30 年間苦勞様でした。30 年の歩みから、山梨 YMCA の課題を率直に聞きたい。また、教会が祈りに覚えることが大事。月に一度はどこかの教会の礼拝に出ること。そうすると教会が祈りに覚える。YMCA は祈禱会から始まっているのだから、教会の祈りに覚えられるということが如何なることかを思うことが大事。教会も同じだが、かつては学生が担っていた。今、大学生に対する働きかけが急務ではないか？ 精神的向上をはかるには青年・大学生への取り組みが必要。お考えを聞かせてほしい。山梨 YMCA は地域的に認められている。それを活かすためにも、すべてのことをどのように係っていくかお聞きたい。また、建物は将来的にどうするか、教会と有機的な繋がりが大事だと思うが。

答え：学生のことは、かなりの学生がキャンプリーダーとして関わっている。梨大、英和大、学院大、都留文大。都留文大では学 Y 的なことが出来たら